



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4369 号 2018.5.10 発行

砥部焼の自助食器 高齢者ら使いやすく 県と地元窯元が共同開発 /愛媛



毎日新聞 2018年5月8日
縁の返しに食べ物が引っかかりやすいようにした砥部焼の自助食器=愛媛県砥部町の県窯業技術センターで、花澤葵撮影

高齢者らが使いやすいように縁の内側に「返し」をつけるなど工夫した砥部焼の「自助食器」を県窯業技術センター（砥部町）と窯元「すこし屋」（同）が共同で開発し、受注生産を始めた。すこし屋の松田歩代表（42）は「誰にとっても使いやすい食器。家族全員が同じ食器を使い、食卓を囲んでくれたらうれしい」と話す。

【花澤葵】

自助食器は、体が不自由な高齢者や障害者らが食事をしやすいよう形状が工夫されたもの。皿やおわん、小鉢、マグカップなどさまざまな種類があり、はしやスプーンも作られている。自宅のほか、介護施設や病院で広く利用されている。

食器の開発に携わったすこし屋の松田歩代表=愛媛県砥部町で、花澤葵撮影

開発は、砥部焼の厚みや丸み、重み、丈夫さといった特徴を生かした自助食器を作ろうと、2013年度から始めた。地元の介護施設などの利用者に実際に使用してもらうなどして10回以上の試作を重ね、2年かけて完成させた。

食器は、縁を外側に丸めて厚みを持たせる伝統の装飾技法「玉縁（たまぶち）」を応用し、食べ物が引っかかってす



くしやすいように

内側全周に返しをつけた。また、最後まで残さずに食べられるように底にくぼみをつける工夫をほどこし、食器の外側に「段差」をつけて、重ねて置いた際の安定性にもこだわった。

県窯業技術センターの調査によると、市販の自助食器は、固定するための底のゴムが劣化し食品に混入する恐れがあるほか、食洗機での洗浄などで破損し、破片で負傷する場合もあるという。

食べ物が引っかかりやすいように縁に返しを、底にくぼみをつけた食器の断面=愛媛県窯業技術センター提供

一方、砥部焼は重みがあり片手で食べても動きに



くく、落としても割れにくいなどの特徴がある。プラスチック製の自助食器と同程度の価格で作れるという。今後は、白内障などを患い目が見えにくい人向けに食べ物が見えやすい食器への改良を目指す。

食器は直径10～20センチで、柄はサンプルから選べる。大きさや形状、柄の要望があれば受け付ける。価格は2000円前後から。問い合わせや注文はすこし屋（089・962・1130）へ。

山梨) ボッチャ知ってほしいと大会実現 鳴沢の小林さん 田中基之

朝日新聞 2018年5月9日



父の正吾さん(左)の助けを借りながら、ボッチャの練習をする小林俊介さん=2018年4月20日、山梨県鳴沢村の山道ホール

障害者と健常者が一緒に楽しめるスポーツ、ボッチャの「第1回山梨県ボッチャカップ」が26日、富士吉田市で開かれる。重度の障害をもつ鳴沢村の小林俊介さん(25)が昨秋、県協会を立ち上げ、今度は大会まで実現させた。競技だけでなく体験コーナーもあり、小林さんは「ボッチャがどんなスポーツかを知ってほしい」と話している。



している。

ボッチャは、重度の脳性まひや手足の機能障害がある人も楽しめるスポーツとして考案された。ジャックボール(目標球)に向けて、赤と青のボールを6球ずつ投げ合い、いかに近づけるかで争う。個人戦と団体戦があり、「陸上のカーリング」とも言われる。

小林さんは生まれつき脊髄(せきずい)性筋萎縮症だった。中学生までは何とか歩けたが、病気が進行して車いすでの生活となった。2016年のリオデジャネイロ・パラリンピックのボッチャで日本が銀メダルを獲得したシーンをテレビで見て、「一球一球がすごかった。これをやってみたいと思った」という。

福井) 障害のある子の読書支援を学ぶ 6月3日に研究会 朝日新聞 2018年5月9日

障害があっても本を読むことが難しい子どもたちにも読書を楽しんでもらいたいと、伊藤忠記念財団(東京都)が6月3日、福井市下馬町の県立図書館の多目的ホールで、読書支援について学ぶ「読書バリアフリー研究会」を開く。先着40人まで。

障害のある子の読書で配慮すべきことやそのための方法、知的障害があっても読書を楽しむ本の選び方など、障害がある子の読書を支援する方法について、大学教授や講師3人が説明する。教員や図書館職員、医療関係者、障害のある子を持つ家族など、読書支援に関心のある人なら誰でも参加できる。

午前10時～午後3時で、無料。5月30日までに電話(03・3497・2652)かメール(bf-book@itc-zaidan.or.jp)で福井会場に参加すること▽参加者の氏名▽住所▽電話番号▽所属▽当日の緊急連絡先を明記して申し込む。(南有紀)

障害者支援SOSセンター 「ばるーん」あす開所 高崎市総合保健センター /群馬

毎日新聞 2018年5月8日

高崎市は9日、同市高松町の市総合保健センター2階に障害者支援SOSセンター「ば

る一ん」を開所する。障害に関するさまざまな相談にワンストップ（1カ所）で応じ、適切な支援が受けられるように関係部署へつなぐのが狙い。市によると、障害に特化した相談窓口を市が整備するのは全国で初めてという。

市によると、「子どもに障害があるのかどうかわからない」「自分が高齢になって、障害のある子どもの将来が心配」などの不安を、どこに相談したらいいかわからず、抱え込んだまま必要な支援を受けられていないケースも少なくないという。

また、相談内容によって窓口が異なっていたため本人や家族が何度も悩み事を話すことを強いられることも課題になっていた。

そこで、福祉サービスにとどまらず、日常生活や学校、就職、将来の生活などさまざまな相談を1カ所で受ける窓口を開設することにした。「ばる一ん」は、ストレッチャー型の車いすが入る相談室を3室設け、周囲を気にせずじっくりと相談できる。精神保健福祉士、社会福祉士、保健師などの専門スタッフが相談を受け、必要に応じて支援事業や手当などを紹介し、専門機関につないでいく。

障害福祉サービスや障害児通所サービスに関する相談に対応するため、市内にある相談支援事業所とも連携し、21事業所が当番制で毎日、相談支援専門員を派遣する。

富岡賢治市長は「障害者総合支援法で、身体、知的、精神、発達障害に加え、制度の谷間だった難病も支援の対象に加えられた。家族だけで抱え込み、殺人にまで至ったケースもあることから、じっくり話を聞いて、アドバイスをしていきたい」と話している。

「ばる一ん」は月曜・祝日休館。午前10時～午後6時。問い合わせは027・325・0111（8日は市障害福祉課027・321・1245）。【増田勝彦】

内海にバリアフリー旅館 別料金で介助サービス、6月から障害者が就労

中日新聞 2018年5月9日

介護用ベッドを設置した和室＝南知多町内海で

南知多町内海にバリアフリーの福祉旅館「サポートイン南知多」が四月下旬にオープンした。別料金で介助サービスも提供し、足腰の不自由な高齢者や障害者らの宿泊を手助けする。六月からは障害者も働き始める。

運営するのは、飲食業などを手掛ける企業「マザーズリヴ」（名古屋市西区）。五年前に閉館した築三十年ほどの旅館を買い取って改築、改装した。当初はグループ会社が運営する老人ホームやグループホームの入居者らの保養所として利用。人目を気にせずに楽しむ姿から、お年寄りや障害者、その家族が気軽に過ごせる宿泊施設の必要性を感じ、利用を一般客に広げることにした。

鉄筋コンクリート造二階建てで延べ床面積は六百十六平方メートル。段差をなくしたバリアフリーで、エレベーターを設置。二階に和室六部屋、洋室二部屋があり、全て多目的トイレを備えた。希望があれば、介護用ベッドも用意する。

一階には二つのヒノキ風呂のほか、リフト付きの貸し切り用ジェットバスを配置（四十五分、税別三千元）。食事は宴会場でとり、ミキサー食や刻み食にも対応する。

リフトの付いたジェットバス＝南知多町内海で

六月からは障害者十人が働き始める。部屋の掃除やシーツ交換、料理づくりの補佐など障害の特性にあった仕事を担当してもらう。二日午後一時に完成のセレモニーを開く予定。



宿泊は夕、朝食付で一人一万二千元(税別)から。介護福祉士らによる食事や風呂などの介助は別料金で一時間二千元(同)。昼食だけの利用もできる。旅館責任者の入山淳さん(45)は「地域の障害者の働く場にもなる。福祉の力で南知多を活気づけたい」と力を込める。(問)サポートイン南知多=0569(89)8011(大槻宮子)

グルメ甲子園GPに「青味大根の梅酢漬」 赤穂精華園生が丹精



神戸新聞 2018年5月9日

第1回グルメ甲子園でグランプリに輝いた「青味大根の梅酢漬」と赤穂精華園のメンバー=赤穂市大津

兵庫県赤穂市大津の障害者支援施設、赤穂精華園やまびこ寮の園生たちが丹精した商品「青味大根の梅酢漬」が、障害福祉施設などが参加する「第1回グルメ甲子園」でグランプリに輝いた。赤穂で育てた大根を、古くから伝わる流下式塩田の製造法で作った赤穂の塩を使って漬けた逸品。園生は「一生懸命に作業して良かった」と喜んでいる。

グルメ甲子園は、障害者が作る農産加工品の品質向上や販路拡大を図るため、県が3月末、神戸市内で初めて開催。県内7施設・事業所が商品を出品した。料理研究家の白井操さんら4人がアイデア、質、地域性など5項目で審査し、「青味大根」が最高の

評価を得た。

商品化のきっかけは、赤穂市が特産の塩の開発や活用を目指す補助事業。赤穂精華園は2017年度、京都の老舗漬物店の指導を受け、市場に出ていない伝統的手法で作られる塩と、和歌山県田辺市の梅干し生産過程で出る梅酢などを活用して商品開発した。

大根は地元の農家の協力や指導を受けながら園生や職員が畑で育てた。20~60代の男女6人が加工を担当。収穫量の少ない桃山大根を使う「桃山大根のぬか漬」も作る。

メンバーの女性(21)は「梅と昆布が入っていておいしいので大勢の人に味わってほしい」と話す。同園は今後、地域との連携を進めるとともに商品の名産化を目指す。「青味大根」は120グラム500円。来季の販売は年明け以降となる。赤穂精華園TEL0791・43・2091(坂本 勝)

福祉施設入所児童 思い込めた115点展示 佐賀市で作品展



佐賀新聞 2018年5月9日

子どもたちが描いた色とりどりの絵が並ぶ=佐賀市のアバンセ

「第28回児童福祉施設入所児童等作品展」が8日、佐賀市のアバンセ展示ギャラリーで始まった。県内の児童養護施設などで暮らす児童らが作成し、それぞれの思いのこもった絵画や工芸、書道の作品115点が展示されている。11日まで。

会場のテーブルには一面に並べられた工芸作品。木や布、粘土などさまざまな素材を使い工夫を凝らした作品も目立つ。壁には色とりどりに描かれた絵画や力強い筆致の書が展示されている。力作ぞろいの中、特選、入選、特別賞に計30点を選んだ。

作品展は、児童や女性、障害児などのために相談や指導などを行う佐賀県総合福祉センターが主催。今月5日から始まっている児童福祉週間に合わせて開いた。同センターの担当者は「作品を見て、子どもたちの元気いっばいな様子や、それぞれの思いを感じてほし

い」と話していた。

<わが家のケア手帳> やる気を引き出す

中日新聞 2018年5月9日



山崎川沿いを散歩する宮崎康子さん(右)と燈さん=名古屋市瑞穂区で

病気などで体や脳の機能が低下すると、その後も家に閉じこもりがちになる高齢者が少なくない。出掛ける意欲を取り戻してもらうにはどうすればいいのか。7年前にくも膜下出血で倒れ後遺症が残ったが、一人で外出できるまでに回復した高齢女性と、女性のやる気を引き出した家族の話からヒントを探った。

「あそこに咲いてるのは八重(桜)ですよ。すごいご老体(の木)だけど」。四月中旬のよく晴れた朝、名古屋市の桜の名所、瑞穂区の山崎川沿いを、

同市天白区の宮崎康子さん(71)と次女の燈(あかり)さん(42)が話しながら、ゆっくり進む。「一人で暗いトンネルを歩いているようだった」と言う燈さんに、康子さんは「今は(トンネルを)抜けたね」と笑いかける。

康子さんは二〇一一年三月下旬に、くも膜下出血で倒れた。手術をして一命は取り留めたが、その四日後には脳梗塞も発症。右半身のまひや短期的な記憶がなくなる高次脳機能障害などの後遺症が残った。

三カ月後に退院し、自宅に戻った。しかし、歩幅が狭くなり、自宅から最寄り駅までの歩いて十分だった道のりに、三十分かかるようになった。出掛けると自宅が分からなくなることもあり、一人で外出できなくなった。話したい言葉を探すのにも時間がかかるようになった。「みっともない自分の姿を近所の人に見られたくない」と自宅にこもりがちになった。

要介護認定を受けられずデイサービスに通えなかったため、同居する燈さんには、仕事と家事、介護という負担がのしかかった。毎日泣いたという燈さんだが「泣くのは自分がかわいそうだから。大事なのは、母のために何ができるかということ」と気付いた。

燈さんは、自信をなくした康子さんができること、やりたいことを見つけた。テレビを見ていた康子さんが「この絵が見たい」と言えば、遠方でも美術展に行った。燈さんは「やりたいと言ったことはすぐ実現する。本人がやりたいことを見過ごしていることもある。小さな声をキャッチすることはそんなに難しいことではなかった」と話す。

康子さんが好きなセキセイインコも飼い、毎日、成長ぶりを報告してもらった。「かわいいものことなら、思い出しやすい。短期記憶の機能の回復に役立つのではないかと思った」と振り返る。康子さんの夫恒さん(70)も毎朝、半ば強制的に散歩に連れだした。先を歩く恒さんを追ううち、康子さんの体力や脚力は回復していった。

康子さんは「家族が自分の気持ちを大切にしてくれた。外に出て人と話すことで、会話も気にせずできるようになった。一人で出掛けるのは緊張するけど、もう不安はない」と笑う。

◆望まないことは無理にさせない

日本福祉大中央福祉専門学校(名古屋市中区)専任教員で、老いや介護にまつわる小説を執筆する渡辺哲雄さん(67)は「本人が自発的に『何をしたい』と思って日頃から動かないと、体と脳の機能が衰える。ただ、やりたいことが見つからないからといって、強制してはいけない。自分から『やりたい』と言えるような支援が必要」と話す。

渡辺さんは若いころから日常的に、新聞などで介護や医療に関する記事を読むことを勧める。「誰もが障害を得て、日常生活や趣味が普通にできなくなる可能性がある。記事を読

み、自分ならどうするか考えておくといい」と話す。（出口有紀）

街角ワイド ボードゲームで社会教育 「地域交流のきっかけに」 洞爺湖町 /北海道

毎日新聞 2018年5月9日

洞爺湖町が、古今東西のボード（盤上）ゲームを使った社会教育に取り組んでいる。テレビやパソコンを使ったデジタルゲーム全盛の中で、ボードゲームはみんなで顔を合わせ、会話をしながら楽しめると見直されている。町は高齢者らを含めた地域の新たなコミュニケーションツールとして、活用を図りたい考えた。【昆野淳】

活動の中心を担うのは、町の地域おこし協力隊員として、昨年1月に札幌市から移住した坂本篤司さん（40）。町の社会教育施設「あぶた母と子の館」が子供の課外活動向けに、米国の「モノポリ」や、近年のドイツゲーム人気の火付け役となった「カタン」など約50種のボードゲームを所蔵していることを知り、活用を始めた。

母と子の館では、小学生らの学童保育の一環として月1回、ゲーム大会を開催。毎年開かれる町のイベント「洞爺湖マンガ・アニメフェスタ」や野外音楽イベント「LOVE TOYA（ラブとうや）」にもゲーム会場を設け、来場者の交流の機会にしたり、町の婚活イベントなどさまざまな催しで活用したりしている。

ボードゲームは、日本に古くからある双六（すごろく）のほか、カードなどを手早く取ったり、瞬間的な判断力が求められたりする「スピード系」、記憶力や計算力などが必要となる「頭脳系」、言葉や仕草などの表現力が求められる「表現系」など多様で、世界で毎年、数百の新しい作品が商品化されているという。近年は医療・教育現場で「アナログゲーム」「ドイツゲーム」などの名称で、発達障害の療育や認知症の予防策などとして利用され、注目を集めている。

坂本さん自身も3年ほど前に改めてゲームの面白さに気づき、個人で約200作品を集め、近隣の伊達市などでも愛好家らが集まるイベントを開いている。「初対面や会話が苦手な人でもゲームを通して打ち解けられる。お年寄りにも楽しんでもらい、地域の子供たちと交流するきっかけなどにしていきたい」と話す。

広島強制不妊 知って

読売新聞 2018年05月09日

◇5月13日、南区 ドキュメンタリー上映や講演

旧優生保護法に基づき知的障害者らが不妊手術を強制された問題について考えてもらおうと、広島市内の病院で不妊手術を受けさせられた佐々木千津子さん（享年65歳）を取り上げたドキュメンタリー映画の上映などを行うシンポジウムが13日午後2時から、同市南区松原町の市総合福祉センターで開かれる。関係者は「一人でも多くの人に改めて関心を持ってもらう機会になれば」とする。（平井宏一郎）

佐々木さんは同市内で生まれ、生後まもなく脳性マヒに。自らの障害が理由で、姉の縁談が断られるなど実家に居づらくなり、施設に入所することになった。1968年、20歳の時、広島市民病院で、同法でも認められていない、卵巣に放射線を照射する不妊手術を受けたという。

佐々木さんは当時、手術により子供を産めなくなるのは知らなかった。施設を出た後、自立生活を送りながら自身の体験を集会などで訴えるようになった。佐々木さんのことを知った市民団体のメンバーにより、活動の様子などをつづったドキュメンタリー映画が2004年に制作された。

県内の審査で手術が「適当」と認められなかった1人を含む、32人分の関連資料が残っていることが確認されている。この中に佐々木さんのケースは含まれていないが、この問題に改めて焦点が当たっており、佐々木さんと一緒に活動していたNPO法人「障害者生活支援センター・てごーす」（広島市西区）がシンポジウムを企画した。

当日は、佐々木さんのドキュメンタリー映画の上映のほか、旧優生保護法の問題点をテーマに、立命館大の利光恵子・客員研究員や広島大の横藤田誠教授の講演もある。

同法人の担当者は「資料もほとんど残されておらず、実態が分からないのが現状。顔も名前も出して活動していた女性がいたことを知ってもらうことで、関係者が勇気を出して情報提供してもらうきっかけにもなれば」としている。

参加費は500円（資料代）。事前申し込みは不要。問い合わせは同法人（082・294・4185）。

社会保障費の伸び、年5千億円程度に抑制で調整 基礎的収支黒字化、目標時期は5年先



送り 産経新聞 2018年5月8日
 経済財政諮問会議で挨拶する安倍晋三首相。手前は麻生太郎副総理兼財務相＝24日午後、首相官邸（春名中撮影）

政府が6月に示す新たな財政健全化計画で、平成31～33年度の高齢化による社会保障費の伸びを年5千億円程度、3年で計1兆5千億円程度に抑えるとする方向で調整していることが8日、分かった。来年の参院選などを前に歳出抑制を厳しくしすぎると有権者の反発を招くとの判断もあり、28～30年度と同水準にする。基礎的財政収支（プライマリーバランス、PB）黒字化の

目標時期は、37年度へ5年先送りする。

6月ごろ策定する経済財政運営の指針「骨太方針」に盛り込む。

経済財政諮問会議の試算では、31～33年度の社会保障費の増加額は最低年7千億円程度。これをサービス効率化といった改革で年5千億円程度に抑え、予算の約3割を占める社会保障費の膨張に歯止めを掛ける。

現行計画では28～30年度の社会保障費の伸びを年5千億円程度に抑える目標を掲げており、歳出改革を通じて達成できる見込みだ。

新しい計画では高齢化の加速を見据え、5千億円を下回る伸びに抑えるべきだとの声もあるが、景気への悪影響や有権者の反発を考え、現行並みにする方向で検討している。

PB黒字化の目標時期は、確実に達成できるタイミングにするなどの観点から、従来の32年度より5年遅らせる。改革を行わない「自然体」で期待される黒字化時期（39年度）よりは2年早く達成する。33年度に中間目標を設け、進捗状況を検証する仕組みも作る。

コスト削減、道筋描けず 京都、支え合い型介護の利用低迷 京都新聞 2018年5月8日

京都市による軽度者向け訪問介護サービス			※利用割合は2017年11月時点
	介護型	生活支援型【新設】	
利用割合	61.2%	37.5%	1.3%
提供サービス	身体介護と生活援助	生活援助	生活援助
対象	身体介護が必要	認知症や退院直後など	それ以外の高齢者
担い手	ホームヘルパー	ホームヘルパー	養成研修修了者ら
事業所への報酬	国の介護予防給付時と同じ	「介護型」より低い	「生活支援型」より低い

75歳以上になるなど、今後も介護が必要な高齢者が増えるのは必至。事業所に支払う報

酬を抑え、元気な高齢者にも「支える側」に回ってもらい、将来の要介護化を防ぐというわけだ。だが、初年度のサービス利用が低迷する中で、市民の理解が広がるのかは見通せない。

「担い手が高齢でミニバイクに乗って買い物に行ってもらえないため、違う事業所に変更した」

支え合い型を盛り込んだケアプランの作成を検討した伏見区の男性ケアマネジャーは、専門職のヘルパーと比べ、担い手の技能レベルを不安視する。

専門職でなくても担い手になれる支え合い型は、従来のサービスに当たる介護型よりも事業所への報酬や利用料が安いと、同じヘルパーを求めて介護型などを選ぶ高齢者も多いという。

市は、ヘルパーが担う介護型など、報酬単価が介護保険適用時と同様のサービスは今後減るとみて、社会保障費抑制への道筋を描くが、そう思惑通りに進みそうにない。

人手不足も大きな課題だ。市内には支え合い型の指定事業所が103施設あり、当初の88施設から増えたが、全国的な人手不足もあって介護の担い手が確保できておらず、実際は稼働していない所もあるという。

市は、利用者やケアマネジャーに理解を深めてもらうため、具体的な事例や利用者らの声をまとめたリーフレットを作成するほか、ケアマネジャーとの検討会の開催などを計画している。市介護ケア推進課は「うまくいった事例もそうでない事例も積み上げ、幅広く共有したい」とする。

市内の地域包括支援センターなどでつくる連絡協議会の古川美佳副会長は「各地域に支え合い型サービスを提供する事業所ができ、近所の人を担い手として確保すれば、利用者との関係を築きやすくなる」とし、顔の見える活動が重要になると指摘する。

一方、国が法改正で軽度介護を介護保険制度から切り離した際には、利用者側や施設関係者から強い不安の声が上がった経緯がある。「制度改正を受けて市が前向きに取り組んでいるのは分かる。ただ本来、軽度介護こそプロの技術が必要。不十分な支援で重度化すれば、かえって介護費用が膨らむ。国は目先のコスト削減に走るべきではない。市町村は国の言いなりになるのではなく、利用者側に立って軽度介護の充実を工夫してほしい」（京都市の社会福祉法人理事長）と注文を付ける。

中標津町にゲストハウス、宿泊者は酪農体験 6月開業 日本経済新聞 2018年5月8日

空き家の改修などを手掛ける山川（北海道中標津町）と竹下牧場（同）は6月、中標津町中心部にゲストハウス「USHIYADO」を開く。宿泊者は乳搾りやチーズ作りなど酪農体験を楽しむことができる。町内の飲食店などと連携し、地域活性化にも協力する。



北海道中標津町に6月にオープンするゲストハウス「USHIYADO」

既存の建物の高齢者福祉施設だった場所を改装する。相部屋が基本だが個室もあり、最大19人が宿泊できる。シャワールームの数を抑えるなどして町内の飲食店や温泉施設の利用を促す。共有スペースにバーカウンターを設け、地元住民も立ち寄れるようにして宿泊客と交流してもらう。

主な対象は30代女性で宿泊料金は4500円前後。竹下牧場で作業機械への乗車や牧場散策、チーズ作りなどを体験できる。すでに口コミで予約が入っているという。2019年度までに町内に同様のゲストハウスをさらに設ける予定だ。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

